大春版
翔んでる警視事件簿
国際謀略篇
胡桃沢耕史

翔んでる警視事件簿　国際謀略篇

1989年1月15日　第1刷

著　者　胡桃沢耕史

発行者　豊田健次

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23
電話　東京03(265)1211(代)

定　価　750円
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

©1989 Kōshi Kurumizawa Printed in Japan
ISBN4-16-310710-X

文春版
翔んでる警視事件簿
国際謀略篇
胡桃沢耕史

文藝春秋
750円

●収録作品●

誰がために人を殺すや

下請けは悲しからずや

小便小僧で又逢おう

革婚旅行は海底で

新宿黒社会（マフィア）

BN4-16-310710-X C0093 ¥750E

翔んでる警視事件簿

国際謀略篇

胡桃沢耕史

文藝春秋

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb

目次

PART Ⅰ　誰がために人を殺すや　9
PART Ⅱ　下請けは悲しからずや　66
PART Ⅲ　小便小僧で又逢おう　123
PART Ⅳ　革婚旅行は海底で　180
PART Ⅴ　新宿黒社会（マフィヤ）　224

カバー・本文挿画　河村　要助

ＡＤ　森　玲子

翔んでる警視事件簿

国際謀略篇

PART I　誰がために人を殺すや

『優しいバサイナ王女殿下のお訊ねに、これまで、ただ張りつめていた私の心も、ほんの少しだけ溶けてきました。

私の身柄が日本か第三国かに送られるのなら、そう苦しい思いもしないで死んで行けると思いますが、もしバハーレン国の役人がいう通り、南朝共和国のNCIAの手に渡されるなら、恐らくこの世のあらゆる苦悶を味わって、この体はぼろ屑のようになって死んで行くことでしょう。

死は最初に覚悟していたことですが、王女殿下一人にだけ、私の一番使い易い辺延中国語でお話しできるのを機会に、手帳に記した最後の言葉の意味を申し残しておきます。死んで肉体も魂もこの世から消えたとき、たった一つだけ残るのが、私の只一度の恋の思い出だなんて、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb

百十五人もの大量の人を殺しておいて、随分いい加減な女だとお怒りにならないでください』

暗号・屋

『最初の屋の一字は、私がこの仕事を前にして、せめてもう一度、故郷の母の顔を見たいと、山峡の奥深くにある家に戻ったことを意味します。昔ながらの泥作りの屋根の家です。ベオグラードで知り合い、北京でまた再会した男と一緒でした。

私の生命は事件の日までしかないと決めていたので、二人だけの旅は甘美で、しかも感傷にみちたものでした。

男は日本人だということの他は何も分りませんが、もう僅かの生命を一日一日、燃やすようにして生きていた私には、男が何をする男でもかまわなかったのです。先祖代々、千年も昔から私たちが敵としている朝韓民族の男にこの肌を委ねるのでなければ……』

1

年の瀬も押し詰って後（あと）、十日と少しになった。

新しい年に入り、二月になれば、岩崎警視正（いわさきけいしせい）と、愛妻みずえ警部補の間に生れた長男の翔（しょう）に満一歳の誕生日が来る。

近くマンションのすぐ隣りの部屋があくというのでもう買い取りの手配はすんでいる。翔が生れてからはずっと付添っているみずえの母の和枝は、会津の実家の方はみずえの兄夫婦に任せ、夫には出て来てもらって老後はずっとこの東京の赤坂のマンションで、翔を抱きながら、カウチポテト婆ちゃんを決めこむつもりだ。生後一年間はみずえの勤務に支障のないようにと、お父ちゃんをほうって東京で同居したが、無口ながら婿さんは心優しいし、それに一年も翔と暮していると、この赤ん坊のいない生活など考えられなくなってしまったからだ。

母が張切って東京移住を決心してくれたから、妻のみずえとしては、悩みもふっきれ、ますます殺人捜査にファイトが燃えてくる。

朝早く、二人が出勤の仕度をして廊下へ出ると、お祖母ちゃんに抱かれてエレベーターまで送ってくる翔が、このごろはたった一言だけ『オトウサン』という言葉がいえるようになって盛んに連発する。ただし当人は意味は分らず、それで、父も、母も、お祖母さんも、その他すべての人類への呼びかけの言葉にしているらしい。

「お利口さんにしているのよ」

みずえが頬っぺたにチュウする。エレベーターが来る。乗りこんで扉がしまれば家族の団欒のひとときは終る。夫婦にはきびしい仕事の世界が待っている。同じ殺人係の刑事を勤め、職場で結ばれ、一時は同じ課にいるのはまずいという理由で、本庁と所轄署に職場が別れたが、やはり彼女に代る才能がなく、今はまた同じ、本庁捜一の殺人係刑事が二百人屯している大部

屋に妻のみずえも中堅の警部補として頑張っている。三、四カ月前までは勤務中、ときどき乳房が張って困ったが、最近はもうそんなこともなくなった。

二人はマンションの地下駐車場から、自分たちの車に乗った。ＢＭＷの三二五ｉ型。左ハンドルの外車仕様のままを、夫の白昼夢警視正は鮮やかに赤坂の通りへ出す。

家へ戻ったら仕事の話はしない。家を出たら、子供や家庭の話は一切しない。それでないと夫婦共働きでしかも同じ職場の同じ部署という、本庁でも空前絶後の二人の仕事は勤まらない。運転しながら

「警部補」

夫は自分の妻を職名で呼ぶ。

「はい、管理官殿」

妻は態度も声も一変させ緊張して答える。

「これはまだ部外秘事項だが、刑事部に、来年一月十一日を期して、もう一つ課が増設される。殺しの一課、詐欺の二課、泥棒の三課、暴力の四課、それだけでは時代のテンポに合わなくなった。この間のパリからの女警視正との対応も、今回の南朝共和国の航空機爆破事件の犯人と目される女性工作員の引取り交渉も窓口が一本に絞れず混乱した。それで国際捜査課という課が新設される。本庁や、警察庁からも外国語に堪能で、外国生活の経験も豊かな人材が集められる」

「よかったわ。それではもう何か外国人関係の犯罪が起っても、貴方……」
あわてていい直した。
「管理官殿が一々呼ばれることはなくなり、本来の殺人事件の捜査に専念できますね。実際今年は、ロス事件が少し納まったかと思ったら、マニラの商社幹部の誘拐事件、日本赤連ＮＯ・２の定岡治の逮捕、南朝航空機の爆破、もう一つのアフリカ連邦航空機の墜落と、年末にかけて大事件が殺到して、目が回るようでしたわ」
「うん。私は殺人事件の根絶のため、本庁に奉職した。九月に警視正に昇進して、人事権は本庁から警察庁へ移ったが、私自身は上からどんな命令があっても、捜一の殺人係刑事はやめないつもりだ。もし私一代で殺人という犯罪が根絶できないなら息子の翔に志を継いでもらう予定でいる」
夫は決然としていう。こんな夫がみずえは好きだ。しかしそれを口に出すわけにはいかない。お互いに今は公人だ。それに車はもう警視庁のすぐ手前にある駐車場ビルに入って停った。夫の岩崎警視正は少し気の重い口調でいった。
「ただし暮の中に、これが最後だと説得されて重い仕事を一つ押しつけられそうだな。そんな予感がする。私の予感はいつもよく当る」
そういわれて、反対側から降りた私服のみずえも少し暗い表情になった。警視庁を制服で歩いていると大概の人が婦人警官だと信じずに、有名なタレントが宣伝写真のモデルとして撮影

中を歩いているのだと思う。それほどに美しくスタイルの良いみずえの憂い顔は、一段と魅力的であったが、この場合は見た人は誰もいない。

二人は離れて歩き、そこから二、三分の警視庁に入る。六階の捜一の大部屋へも、エレベーター三台分ぐらいずらして入った。

岩崎はみなの方に向った机に坐る。机には黒い板に『管理官　警視正　岩崎白昼夢』と白い字で書かれた名札がおかれている。

捜査一課は殺人専門の強行犯係が九、強盗犯係が二、放火専門の火災犯係が二、他に特殊犯係が三、の十六係が中心になり、二百名以上の、いずれも鬼をもひしぐ刑事(デカ)さんたちがひしめいている大部屋だ。巡査拝命三、四年の新米警官ぐらいでは、部屋へ入ったとたんに周りの異様な空気に体が硬直して、物もいえなくなる。

その中ではまるで大輪のひまわりのように明るく目だつ、強行二係の巡査長乃木圭子が、いつものように、大きな薬缶を持って、岩崎のデスクの前へ来て

「お早ようございます」

丸い大きな目をくりくりさせながら挨拶した。捜一に入ってきたときは成人式を終えたばかりのまだ女子高校生そのままの娘だった。ずっと岩崎の下で働いている。もう二十五歳。早く誰かと結婚させないと行き遅れになってしまうぞと、岩崎警視正はちょっと胸が痛い。

乃木は毎朝の仕事始めとして、岩崎の茶碗からお茶を入れ始める。もっと後輩の婦警や巡査

もいるのだが、決してこの仕事は他人にやらせない。

大きな茶柱が一本立つ。

まさに神技だ。他の誰がやってもこうはいかない。岩崎もいつものように無言で取り上げて飲もうとして、『おやっ！』という顔で途中で手を止めた。二人とも同時に茶碗の中をのぞきこんだ。毎朝浮ぶのとは段が違う太い茎が一本浮んでいる。

乃木刑事の丸い目はますます真ん丸くなり、いつもは何物にも動じない警視正の冷徹な視線も一瞬、吸いこまれるようにその茎に止まった。重い口を珍しく開いた。

「やはり何か起るな」

乃木は慌てて頭を下げた。

「申訳ありません」

「いや、乃木の責任ではない。自然の摂理だ。私のところに大きな事件が回されてくる」

それでも乃木は責任を感じて顔を真赤にしている。以前、大部屋を出た所の廊下の向い側の棚に祀られている、捜査大明神に手を合せて、『どうか事件が起りますように』と祈ったとたん、殺人事件が発生して以来、こういう神仏の縁起をひどく気にするようになった。やはり岩崎の独り言が終らないうちに電話のベルが鳴った。

本来ならさっと乃木が手を出すところだが、片手に薬缶をぶら下げているし、何となく気おくれして手が出ない。乃木の心臓は制服の下で音をたてて鳴っている。すぐ電話を取った岩崎

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongb